



フランソワ・ウタール／フランソワ・ボレ 共編
三輪昌男 訳

『別のダボス』

新自由主義 グローバル化との闘い』

ポルトアレグレ？

見落としてしまいそうな書名である。ダボスはスイスの保養地のこと。世界の有力者がこの地に集まって開かれる「世界経済フォーラム年次総会（俗にダボス会議）」の最近の中心テーマはグローバリゼーションの推進である。だが、途上国などには、これが経済的貧困・環境破壊・文化的混乱・主権侵害など多くの災厄をもたらしている。そこで1999年1月下旬、チューリッヒで「ダボス会議」に対抗する国際会議「抵抗と闘争のグローバル化／別のダボス」が開催された。以降、シアトルのWTO会議に反対する運動の成功を皮切りとして、先進国が主導する世界資本主義システムの再編に対して、代案を突きつける社会運動が大きな広がりを見せてきた。そして2001年にはダボス会議と時期を合わせて第1回の世界社会フォーラム（World Social Forum：以下WSFと略記）がブラジル南部のポルトアレグレ市で開催され、より大規模で総合的な運動に向かう態勢を整えた。このような「別のダボス」の運動の骨格を紹介するのが本書のねらいである。

わが国ではこのような社会運動に対する理解は不確かである。その運動の規模や開催地ポルトアレグレの位置ですら不案内な状況にある。主催者のホームページで2003年WSFの規模を確認しよう。1月23～27日

の期間中に設置された協議会やパネルなどのワークショップは1286である。これに156カ国から2万人余が各団体の正式代表として参加した。また、51カ国・1423メディアから4000人余のジャーナリストが取材に訪れた。世界中から訪れたオブザーバーや専門家・活動家を加えると集会参加者は10万人に及んだ（2001年は約2万人、02年は8万人）。そして、04年はインド開催を決めて03年WSFは成功裏に終わった。

フォーラムでの論議は、領域も様式も多様であるが、共通の目標は「別の世界は可能だ（another world is possible）」にほぼ収斂されようとしている。つまり、富める国や企業の利益に即したグローバル化ではなく、真の意味での地球社会の実現である。このような志高く、かつ規模も壮大な運動を紹介しない日本のメディアの姿勢には疑念が湧く。三輪昌男氏の取り組みはまさに時宜にかなっている。

「別の世界」の模索

99年に「別のダボス」を呼びかけたのは「市民を支援するために金融取引への課税を求めるアソシエーション（ATTAC）」（本部・フランス）、「多国間投資協定（MAI）に反対する連合」（フランス）、「代案のための世界フォーラム」（セネガル）、「構造調整参加型監視国際ネットワーク」（不詳）などの国境を越えた市民団体である。本書ではそれらの論客たちの比較的短い論文が多数収録されており、運動の原理や歴史的な展開を俯瞰することができる。構成は、第Ⅰ部「グローバル経済システムの最近の動き」、第Ⅱ部「グローバルな政治的対応の重要性」、第Ⅲ部「異なる種類のダボスについて」、そして二つの歴史的宣言を収めた第Ⅳ部「補遺」か

らなる。

まずは新自由主義グローバリゼーションの問題点が多様な視点から整理される。先進国や国際機関によって貿易や金融の自由化が急速に推進されてきた。その際、経済活動の拡大によって途上国には貧困から脱出する可能性が提供される、という論拠が強調されてきた。だが「国連開発計画」は、グローバル化の急展開によって、貧富の差がいっそう拡大したことを警告している。最近、世界人口の20%に当たる最富裕層が世界の所得の82%を手にし、20%の最貧困層が世界所得の1.4%を分け合っているのだ。市場原理主義の楽天ぶりは事実において破綻している。

わずかの「勝ち組」に対し、圧倒的な数の「負け組」が憎悪や敵意を高めて、政治的な危機を深める状況は不幸なことだ。もちろん、これは宿命的なものではなく、社会構造的に発生している。ならば、発生源のシステムを変更すればよいのだ。第III部以降はそのための戦略や運動が検討される。もちろん現在も世界各地で模索中である。その成果をつきあわせるためにWSFが開催されている。世界の産業界・金融界の実力者がグローバル化戦略を話し合う「ダボス会議」に対抗する、「別の世界」が次第に明らかにされつつある。

意気軒昂な「新従属派」

彼らの主張や運動を決して政治主義的な「反グローバリズム」と誤解してはならない。むしろ、人間の顔をしたグローバリズムの主張者といえる。資本主義の世界システムそのものを問題視するのではなく、その構造転換が問題の核心である。中核が周辺を、北が南を従属する構図を対等の関係に

正すことを主張している。ここで、I.ウォーラステイン『史的システムとしての資本主義』（1983）や、S.アミン『中心＝周辺経済関係論』（1981）などの「新従属派」理論を思い起こす読者も少なくないだろう。実際に、彼らは今も健在で、WSFを理論的に支える役割を果たしている。本書を通読すると、彼らの理論が新たな状況の下で継承・発展を遂げていること、さらにアミンは中心的な組織者として活躍していることなどが理解できる。本書の装丁は軽い、重厚な理論を基盤にしていることを知るべきである。

先述のような情報バイアスの下では非常に有益な文献であることは疑いない。ただし、残念ながらやや難解ではある。それは短い論文や宣言を編集した原書の構成や翻訳書の限界もあろうが、より多くは背景となっている膨大な事実を読者が知らないためである。この点を補うために、関連資料の併読をお勧めする。ATTAC『反グローバリゼーション民衆運動』（2001.つげ書房新社）は中心的な運動組織が自ら綱領や運動の姿を簡潔に述べている。また、ATTACの副代表であるスーザン・ジョージは本書で戦略的論議を担当しているが、同氏の著書『WTO徹底批判！』（2002.作品社）は、貿易の別のあり方を平易に述べている。なお、WSFのホームページ (<http://www.forumsocialmundial.org.br/home.asp>) はこの運動に関する最新資料を提供している。

——つげ書房新社 2002年12月

1,800円(税別) 238頁——

(徳島大学教授 中嶋 信・なかじまこと)

訳者の三輪昌男国学院大学名誉教授は、去る2月16日に急逝されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

(「農林金融」編集)